

嬉泉の新聞

- 嬉泉の新聞／第28号／1994年（平成6年）6月発行（年3回発行）
- 発行所＝社会福祉法人嬉泉・東京都世田谷区船橋 1-30-9（〒156）
TEL 03-3426-2323
- 発行人＝石井哲夫 • 編集人＝友田篤

自閉の子と接するようになって

成瀬 悟 策

それまで子どもの不適応とか大人のノイローゼや心身症などの心理療法を主としていた私が柄にもなく脳性マヒの子を中心とした肢体不自由をみるようになったのは、1966年のことでした。この子たちのからだそのものは動き得るのに、当のからだの持ち主である主体が自分の思うようには自らのからだを動かし得ないというのが不自由の本質だと分かったからでした。すなわち、それまではからだが動かないのだから生理的・生物学的な問題と思っていたのが、実は心理的なものだったのです。爾来、自分のからだの動かし方をこの子たちにどうやって身につけさせるかという動作法の開発に腐心することになりました。

これがほぼ一段落しかけた1980年、降って湧いたように持ち上がったのが自閉・多動の子にこの動作法が有効という今野義孝・大野清志両君の経験でした。“プレイ・セラピーで半年も一年もかかって効果が現れ、やっとアイ・コンタクトができるようになったなどという報告があるが、脳性マヒでやっている動作法と同じ方法では4-8セッションで殆どの子がアイ・コンタクトをするようになる”というのが私の最初に聞いた彼らの台詞でした。自閉症への対応は非常に難しいと聞いていたので、動作法なんかがそんなことができるなどとはとても信じられないというのが私の実感でした。好運にもその夏の私達の一週間訓練キャンプに自閉の子が4名参加したので、直接試してみましたが、これがまた信じられないほどの素晴らしい効果でした。アイ・

コンタクトなどは全員2日目にはパスしましたが、むしろそれから後にどう対応していくかが中心の問題となってきました。

その課題は二手に分かれました。ひとつはご多分に漏れずセラピストとの人間関係・コミュニケーション、今一つはリアリティー（現実）感覚の実感です。前者では、先ず相手に身を任せる体験、与えられた動作の課題を受容れる体験、それを受け取って実現する体験及びその実現過程をセラピストとの二人三脚で協力・共同していく体験を得させること。後者では先ず自体の特定部位に注目してからだを実感する。それを自分で弛めたり、動かしたりして体感する、それによって心を自分自身に向ける体験、重力に対面して体感する、重力に自体を対応させながら大地を踏んまえている実感、物理的外界に自体を対応させる自己活動の実感的な体験などが企てられました。それらが予想外に有効だったので、さらに相手の微妙な動きを感受する、相手の意を汲んで自らの動作課題として受取り、その実現を努力する体験及び、相手との力比べ、相手と張り合って、積極的に勝とうと意欲する体験などを得させようとしています。腕相撲と両腕の引っ張りっこというゲームを用いているのですが、相手に勝つとか勝とう・勝ちたいという体験を得させるのには未だ成功できないでいます。皆さんに良い知恵がありましたらお教え頂けると有り難いのですが。

（九州大学名誉教授）

強度行動障害療育事業が始まった。施設職員は、従来からの利用者の顔ぶれと比較してみると、当初のうちは、すごい猛者が来たものだと思っただけだが、次第に月日が経つにつれて、何とか収まり、これで何とかやれるわい等と思っできていくようである。だが、気を休める暇もなく、今度は、従来からの利用者の様々な意志表示というか行動障害が始まる。ドライブ途中で気に入らないことがあったといってバスのフロントガラスを足蹴にして、ヒビを入れてしまったという事故が起きる。原因を考えてみると、「人格中熟」からの事故である。人格中熟とは妙な言葉であるが、未熟者が少しものの道理が分かってきたが、人格の成熟がその認知の改善に追いついていけないことから生じてくる問題現象をとらえた私の命名である。

この人の場合は、今まで精神的な「家無し、親無し子」であったのが、「うちに帰りたい、親に甘えたい」という気持ちが芽生えてきたという進歩があったが、それを親がしっかり受けとめてくれなかったからだという。その親はご亭主に去られ、非行の下の子の事で、目下手一杯なのである。「そ

れなら家に帰さないようにして、もつと職員で受け入れたらいいじゃないか」と言えば、「受け入れるなどと簡単に言わないで欲しい。この子に関わる職員は、主任さんだけです。」と泣き言が帰ってくる。今の職員の状態では、無理なことを要求していることは、百も承知である。職員の専門性を高めていくためには、このような困難な課題を、敢えて職員に突きつけてきている自分の残酷さに時々溜め息が出ることがある。しかも

施設経営の創造性

(その十九) 石井 哲夫

このような状況が行政はじめ、わかってほしい関係者に伝わっていないのである。この節、のんびりと「当事者の発言を聞こう」等という甘ったるい有識者の言葉を聞くとうんざりしてしまう。

当事者の発言として施設職員に恨み辛みがあるという気持ちがこもっているのは、ごくごく当然のことであろう。我々だって、施設入所前に家庭や学校で受けた利用者者の心の傷を何とかしたいと精一杯なのである。

むしろ本人が、何とも思わない

はた迷惑な状況を我々がどうして受けとめられるか苦心させられてるのである。

職員の専門性の指標としては、混乱し、荒れ狂おうとしている利用者の心理的な兆候に早期に気づくか、或は、荒れ始めているが見えない利用者の心理的な軌跡に気づいて、どれだけ早く混乱を沈める対応が出来るかということであるし、最終的には、荒れ狂っている利用者を押さえ込めるかという、ウルトラCまでの状況がある。こ

れを現場の職員と研究的にとらえていかなければならないのであるからそのケース研究なるものも大変なことなのである。事例記録の書き方とか行動評価の仕方などということもよく分かっているが、そこについていくことで精一杯という状況なのである。

正に荒馬に飛び乗るような毎日を送っていくと、か弱い女性が社会福祉実践に身を投じようというけなげな気持ちでは、全く通じない。ましてや、非指示的カウンセラーリングでのカウンセラーの耐性や

勇気を実践的に実践していくという次のような荒技が求められているのである。

- ・ 気持ちを寄せる
- ・ 名乗りを上げる(意図の明確化)
- ・ わかる言葉をぶつける(気持ちを通じる)

- ・ 耐えに耐える(焦らない)
- ・ 負けない、くじけない

- ・ 状況の分析をすばやくする

- ・ 状況を変える(ロールプレイ)

以上のような解説でも正確な解説とは言えない。帰する所は、ともかくもやらなければいけないという使命感と、自分の信念や姿勢に

関しての確信と、スーパービジョンを受けようとする気持ち等の基本的な職員の資質になっってしまうのである。それにしても、よい福祉現場を少しでも多くしていくためには、自分の目の前に起きている事実について正確に捉え、語れる職員が一人でも多くなることと、自分の感情や変な考えにとらわれず、人間を情緒的にきちんと共感でき、その心理的な力動に介入できる職員の自発的で闊達な態度や、自己評価ができるようにスーパービジョン体制を整えていくことが望まれるのである。

私たちの

うぶう

須藤福祉センター各事業所からの報告

講師招聘と私たちの専門性

金澤 信一

心身障害者生活実習施設、という板橋区独自の枠組みを持つ高島平五丁目福祉園には、主として養護学校高等部を卒業した、様々な障害を持つ人たちが、あるいはいくつかの障害を併せ持つ人たちが、さらにこうした基礎障害に加えて、適応上の困難さから、生活的な介助だけでなく、心理的な援助を必要とする人たちが毎日通所しています。

そこで私たちは、多くの障害の実態を踏まえながら、利用者にとって充実した日中活動を作っていくこと、つまり、利用者の安全管理、健康管理から始まり、利用者自身の状況を理解し、それに基づいて援助方針を立て、人間関係をつくりながら、その人の自己実現に向けていく実践が求められます。その

ためには、ひとりひとりの障害の内容を私たちが承知していなければ、その人の心の理解や適切な状況の設定が出来ないばかりか、危険ですらあります。

ところが、私たちが様々な障害すべての専門性を併せ持つことは、たいへん難しいことです。そこで私たちがそれぞれの分野の専門家とつながりを持つこと、状況に応じて連絡が取れ、指示を受けられる体制を整えること、専門的知識を学べる場が必要となります。そのために、私たちは、高い専門性を持つ講師を招聘しています。



内科医の柴原奈美先生（平成3年度から）、精神科医の後藤多樹子先生（平成5年度から）、陶芸指導の趙昭昭先生（平成5年度から）、社会福祉法人嬉泉から喜多克彦先生（平成5年度）。多彩で、強力な講師陣からは、利用者への直接処遇だけでなく、職員への講義や、活発な意見、質問が出される事例検討の場を設け、貴重な指導を得ています。こちらのことをよくわかってくれて私たちは大変信頼しています。

私たちが困難な障害を持つ利用者を「受け入れてあげたい」という意気込みや、情熱だけで引き受けることは甚だ安易であり、十分な責任はとれません。利用者の状態を正しく理解し、援助することは難しいことであり、援助者の日

常的な感覚だけでは対処しきれるものではありません。利用者の障害に基づく条件、適応上の問題点を専門的尺度に照らし合わせて理解し、介助、援助に臨むことが求められます。その際に私たちが講師から学べる情報がよりよい援助を行うために極めて重要であることとなります。

私たちの専門性とは、こうした専門家の協力を得ながら、可能な限り利用者の内面の活性化を促し、本人が満足し、周囲にも認められる状態、つまり適応への援助ではないかと思っています。そのためには、まず利用者との人間関係を作ることで、それから、適切な目的を彼らを選択できるような状況設定を行うことが必要で、具体的に言えば、安全管理、健康管理から始まり、利用者と援助者とのよい相互関係を作り、利用者が精神的に安定し、充実した生活、価値の高い目標を持つ活動が出来るように働きかけていくことではないだろうか。そのように思います。

以上のような考えにより、高島平五丁目福祉園では、処遇援助を行うための必要な対処として講師の招聘を行っているのです。

（高島平五丁目福祉園施設長）

地域に支えられて

●感謝のご芳名

(ご寄付をいただいた方)

平成五年度(平成五年四月より平成六年三月)世田谷区及び袖ヶ浦・板橋の本部に金品のご寄付をいただいた方々のご芳名を掲載させていただきます。衷心より感謝申し上げます。なお、年二回のバザー開催に際しては、多大の方々のご協力をいただいておりますが、紙面の都合上掲載はできませんでした。どうかご了承ください。(順不同)

ひかりのガレージセル代表工藤鎮子様、納土彌雄様、大山勝地様、小林秀一様、片桐一平様、池上嘉信様、村田操様、土谷新様、吉原勝彦様、早瀬進様、中西光子様、小原運了様、高田昇一様、福原真智子様、瑞穂工業技術研究所様、武居工務店様、竹内靖夫様、二本俊彦様、村岡精一様、鈴木豊子様、山岸敏男様、中西健一様、菅尾伸二様、千歳丘教会様、田辺和夫様、湯浅正様、東洋英和女学園短期大

☆袖ヶ浦地域協力者

学宗教部様、株式会社エル・ローズ代表取締役前川長慶様、小原ナツ子様、工藤成一様、荒井恒夫様、斎藤穂様、岡庭博様、ひかりの学園共済会様、嬉泉後援会様、大日本法令印刷株式会社様、三菱製紙販売様、日立親切会様、細川省三様、世田谷区様、田中吉男様、都営アパート6丁目自治会様、篠ヶ谷戸町内会様

昨年度の袖ヶ浦地域でのボランティアの方々、利用者の雇用や実習を受け入れて下さった事業所、また、日常的に「のびろパン」等の販売に協力して下さっている方々、養鶏・牧場作業に無償で野菜や貝殻等を提供下さる方々、毎日の買物指導や週末帰宅の際にご協力下さっている方々あるいは地域での各種のイベントにお誘いくださった方々、その他様々にご協力をいただいた方々のご芳名です。(順不同)

袖ヶ浦高校生ボランティアの皆様、機織り講習会参加の皆様、施設を育てる市民の会の皆様、スーパードン・いぬい様、ビジネス旅館長浦様、ダスキン袖ヶ浦店様、新王子製紙資材物流センター様、袖ヶ浦市財政課様、JA袖ヶ浦長浦支店様、同根形支店様、シマムラ文具店様、主婦の店さつき台支店様、ブックセンタータカコヨシ内フォト今関様、いその文具店様(店頭の八百屋さん)、シバサキ建設様、福王台保育園様、根形保育園様、久保田保育園様、昭和中学校様、三育フーズ様、とんかつ不二亭様、袖ヶ浦市民会館様、根形公民館様、平川行政センター白鳥様、長浦公民館様、平岡公民館様、袖ヶ浦郷土博物館様、袖ヶ浦市消防本部様、鍋島金物店様、村山タクト製作所様、花川金物店様、保坂石油様、根形自動車様、黒木照子様、新谷多恵子様、加藤義明様、池田久司様、比和野京子様、井村ますみ様、明峯和子様、提橋元子様、野里公文塾土屋様、斉藤とも子様、三浦トヨ子様、松崎さみ子様、秋元カク様、富士食堂様、鈴木建材様、蔵波小学校様、松本一男様、渡辺義一様、黒川孝男様、仲田由夫様、平野米穀店様、カネサカ水産様、

大橋屋豆腐店様、遠藤隆吉様、ミニストップ長浦店様、セブンイレブン袖ヶ浦店様、袖ヶ浦駅E-look様、鳥海商店様、水谷商店様、日本道路公団習志野パーキングの皆様、袖ヶ浦市生活環境課様、同広報課様、東京ガス木更津営業所様、東京電力労組青年部様、永原陸子様、春日裕様、古川皮膚科医院様、河村義昭様、袖ヶ浦ロータリークラブ様、ケーキ赤とんぼ様、長浦駅様、

子どもの生活研究所改築基金御協力有り難うございました

竹田健様、立石新一郎様、山田政夫様、平野保雄様、山中勝子様、時永康男様、伊藤温様、片桐一平様、池上嘉信様、工藤正路様、宇佐美斌様、清水佐久子様、中島健一様、清水隆宏様、久和原勝様、伊佐文夫様、田辺和夫様、山田久一様、岩井俊一様、大山勝地様、生嶋誠士郎様、平岡宣憲様、赤沼健悦様、宮内章様、松島正儀様、川島良一様、清水正様、後藤健一様、松井精三様、岩藤美枝子様、黒沢信子様、坂洋一郎様、秋山信靖様、野田藤武様、深山智子様、富川水門様、原伸様、鍋木淑子様、亀谷道造様、川本寿恵子様、石川

清司様、伊藤良三様、本間啓司様、今井久仁子様、横須賀正子様、柳内龍二様、石渡望様、坂芳雄様、桐原淑子様、中杉幾四郎様、小松京子様、川島淳一様、石塚伸一様、江川英晴様、藤山礼子様、桜井理治夫様、野田啓恵様、綿貫光郎様、高田昇一様、大口八郎様、菊谷陽一様、小山悦夫様、伊藤満洲雄様、黒須光様、宇佐美郁子様、藤田慶之助様、鈴木邦夫様、蓼原好宏様、森藤成江様、若林貴世志様、藤岡純子様、金子温子様、江川美様、竹上雄司様、藪下恵子様、椎名素夫様、浅野一郎様、式田正利様、前沢八洲雄様、田中雄一様、木村文夫様、新井康浩様、弓木裕一様、川崎義人様、亀谷精一様、伊賀田秀基様、藤本俊平様、市川すみ様、立石勇様、武内勲子様、村田堅一様、増田稔様、田村聰達様、土井孝様、近岡俊郎様、磯田良一様、東海林由美子様、岡正雄様、河野篤盛様、大久間喜一郎様、清水敬子様、沓掛千恵様、青木邦之様、野田玲二郎様、小林裕子様、吉野フミ子様、榎本石材店様、榎本イト様、高木直也様、持田才子様、沢田保邦様、二又誠司様、鶴原勝郎様、中矢利子様、大竹政宏様、富所啓様、梅田嗣芳様、早瀬成子

様、小川廣記様、藤原治嗣様、原京子様、矢島機敏様、小原瑞穂様、吉沢俊様、大村光宏様、石川信子様、武井慶彦様、若杉久美子様、高橋好子様、宮田秀絵様、作山ユキ子様、柴田昭三様、小林秀一様、易田恭子様、谷田道夫様、山口潔様、清水敏様、大塚あき様、栢野健様、高村千枝子様、高杉恭子様、佐村要子様、後藤よね様、後藤圭司様、南村昇様、市川清志様、設楽智子様、沢野圭子様、小野双葉様、青瀬美智子様、岩永照子様、岡本克敬様、石渡康雄様、豊野睦様、谷川紀幸様、小林正子様

(平成6年5月31日現在)
(順不同)

施設を支える市民の会主催

「なごやかなの店」開店

毎週金曜日13時半～15時半まで。場所、袖ヶ浦ひかりの学園販売作業棟付近(手作り看板が、目印)ボランティアメンバー九名。花柄エプロン、羊型の名札がトレードマーク。この店には、多くの方々の思いと協力が込められています。今回はその所を書きたいと思います。

私が、のびるパンのうわさを耳



にして学園へ押し掛けたのは四年前。その上、ボランティアとして、機織り工房へ週一回通うことになりました。当時、学園に外部の人が入ることはあまりなかったようでした。自分の作品をガンガン織っていたところ、「職員にと」と声がかかりました。

さて雇われたものの、私に何が出来るだろうと悩んでいた頃、「機も余っているし地域の方々に来ていただいて織ってもらっては？」と小野(多)先生から話があり、大胆にも機織り講習会を企画しました。この時の第一期生

が、今、お店で大活躍の井實さんなのです。講習会を重ねるうちに仲間が増え、これだけの力があれば何か出来るのではないか、のびる販売で地域に出かけていっているのだから、今度は地域の方々に学園の様子をそのまま見ていただくのはどうだろう。何もないと入りにくいので、お店を出して買い物で、というのかどうか。と声がありました。

その後話し合いを重ね実現へ向けて着々と準備していただき、3月のバザーで開店のチラシを配り、青空の下、机と看板をならべたお店が始まりました。

それからは毎週交代で二名の方々が、開店準備から売り上げの計算まで担当してくださっています。皆さんとても楽しそうに仕事をしてくれています。また学園側も、私がかつて感じたボランティアに対する警戒心もすっかり和み、店の名前通りだと感動を覚えます。ぜひこの力を大きくしていきたい。私は、職員とボランティアのどちらの側も経験していることを生かして、両者の間の掛け橋の一部分として頑張りたいと思います。皆様どうかよろしく願っています。

(池田万紀子)



嬉泉の出来事

〈子どもの生活研究所〉

生け花のボランティア

子どもの生活研究所では、今年の春から生け花のボランティアの方が来てくださっています。研究所と同じ町内に住む方で、研究所のためにご自分の特技を生かしてくださることとなりました。最初に来てくださって以来、時期を見ては、いつも新しい花を飾りに来てくださっています。その花は、

子どものへやとすこやか館の玄関に飾らせていただいています。

今までは、バザーなどの行事以外にはなかなか地域の方との交流が持ちにくかったのですが、このような形で、施設の中に入ってきてくださるということはとてもうれしいことです。地域との交流という点、何か行事を行って地域の方に参加していただくだけになりがちですが、日常生活の中で交流できることも大切ではないかと考えさせられます。これからもこのような身近な交流を大切にしていきたい思います。(小池 朗)

〈袖ヶ浦〉

室内温水プールが完成

袖ヶ浦のびろ学園が開設して十七年。念願のプールが完成しました。自閉症の治療には水泳指導が極めて効果的であることは広く知られております。私たちも、これまで養護学校や市営のプールを随分利



用してきたわけですが、今や自前で、それも温水プールですから、一年中使用可能なのです。これまでに培ってきた療育方法や理念に、これからは水泳指導あるいは水治療ともいうべき実践と研究の場が出来たわけです。資金協力いただいた日本自転車振興会に紙面を借りて感謝とお礼を申し上げる次第です。(友田 篤)

『パンの新販売車』

「販売」は私たちのいくつかの社会参加の試みの中でも大きなウェイトを占めている方法です。中でもパンの販売は独自に開発してきたもので、地域との交流にも日常的に大きな役割を果たしてきてお



ります。そこに新たな販売車を導入することが出来たのです。これは、サイドドアを上げると棚にパンが陳列されていてその場で即販売できるよう改造されている移動販売車です。新たな社会参加の展開を期待しているところです。資金協力をいただいた丸紅基金に感謝とお礼を申し上げる次第です。(友田 篤)

『春を楽しむ会』

4月20日、風もなく穏やかな日となり、のびろ、ひかりの合同でバーベキューを楽しみました。本来なら「鯉のぼり大会」だったのですが、利用者の年齢もあがっ

てきたこともあり、趣向を変えてみることにしました。係になったばかりの私たちにとっては、前例もなく、準備には戸惑いましたが、当日、利用者が落ち着いて参加してくれるか、楽しんでくれるかが一番気掛かりでした。間がもてない人もいたものの、パーベキューでは、皆落ち着いてよい雰囲気です、よく食べていたようです。

(矢沢 恭子)

〈赤塚・高島平〉 授産施設の現状と展望

赤塚福祉園がスタートして二年目を迎え、授産施設も実質的な授産活動を展開すべき年となりました。昨年度末の研修の際に園長より授産施設の工賃支払額の目標値を具体的に提示されました。これを受けて職員は研修期間中何度も話し合いを重ね、第一点、目標値の年度内早期達成。第二点、嬉泉の展開する授産活動の在り方の研究、という両面からのアプローチを『エネルギーに活動する。』というスローガンに集約し発表しました。

新年度を迎え早速、新規受注開拓活動を開始しました。区内ローラー作戦、縁故知り合い何でも情報作戦、ともかく毎日のように会社訪問を続けました。不況のご時世を反映して逆に「内の息子にいい仕事ないかね。」と持ち掛けられたりと様々ですが、4月、5月この二ヵ月間で、簡易作業部門、多少専門的技術を要する工芸部門に十件を超える業者の開拓が出来ました。アンティークの銀食器を磨く仕事など作業に入ったものもあります。これらは、職員が足で稼いだり、皆さんからの情報を得た結果です。お力添えをいただいた方々に感謝いたします。これからは耳寄りな情報がありましたらご一報いただけると大変有り難いです。

現段階の見通しとして、工賃の目標値は何とか達成できそうな感触を得ています。今後は、赤塚福祉園授産施設の指導内容と体制整備に向けて、『エネルギーに活動』していく心積りでおります。どうか皆さんご声援ください。

(富田 順三)

高島平五丁目福祉園

「懇親会」

5月21日、平成6年度、第一回目の懇親会が行われました。

この会は、園に関わるご父兄同志、そして職員との関係を良好なものにして行く上で、大事な第一歩という位置づけがあります。昨年のこの会を思い返すと、どこことなくごこない印象が残っています。利用者もご父兄も、また職員も全く新しいメンバーでスタートしたこともあって、誰もがあんな緊張感を感じていたと思います。人と懇意になる、親しくなるといふのは、実は結構難しい。

しかも、それを意識してやろうとするとさらに難しいものです。それに比べて今年の懇親会は、随分と雰囲気違っていました。今年は、パーベキューパーティー。利用者の通園バスで園にいられたご父兄は、「懇親会では働くもの」と心得て下さってか、野菜や果物の下準備、おにぎり作りはあつという間に片付いてしましました。一方、会場の光ヶ丘公園には先発隊が行っていて、会場の設営、炉の火おこしを進めていました。食材の準備を済ませた利用者のご父兄と職員を乗せたバスが12時に会場に到着。3グループそれぞれに、段取りをする間もなく、ご父兄がすぐさま調理にかかり、パーベキューと焼きそばがどんどんできあがって行きました。

誰ともなく音頭を取り、それぞれの方が遠慮せず、それでいて和やかに働き、食べる。一年を経たご父兄の打ち解け方は、昨年とは明らかに違っていました。今年度新入園の利用者のご父兄も、違和感なくすぐにとけ込める雰囲気。雑然としてはいても、懇親という言葉が無理なく当てはまる、アットホームな空気がそこにはありました。

食事が終わり、自己紹介も和やかに済んだところで、利用者と職員はひとまず散歩に出ました。会場はそこから、大人の時間。ご父兄の自然発生的なまとまりを基礎に、高島平五丁目福祉園支援クラブの発足のお話合いが、お菓子片手に始まりました。会の主旨には、ご父兄同志の懇親と園への協力が盛り込まれていると聞きます。五月晴れの空のようにさわやかで、和やかな会に育ち、利用者の豊かな人生のために共に手を携えて行けることを心から願っています。

(北川 裕)

ひかりのタイムス

独立第22号

ひかりのタイムスは、嬉泉広報責任者の友田氏がアドバイザーで、利用者の山岸が編集長をしています。

今回は、ひかりの学園設立十周年を記念した特集号を企画しました。

ひかりの学園での

十年間

飯田 真奈子

私は一九八四年四月に、袖ヶ浦ひかりの学園に入り、今年でちょうど十年になりました。年月が経つのがとても早いです。私はこの十年間を振り返ってみて、色々な体験をして、先生方に色々な事を教えて貰って私自身も大きく変わった様な気がします。現在は近くのビジネス旅館へ働きに行き給料を貰い学園での仕事の食堂のお手伝いや、整理室の洗濯たたみなど沢山の仕事をやりこなし、皆から頼りにされています。

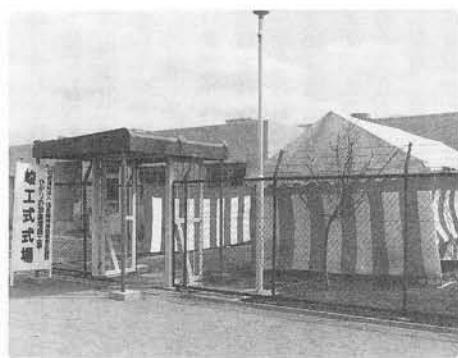
ひかりのに入ったばかりの最初の一・二年は、とても今みたいに仕事が出来ませんでした。洗濯物をたたむのも当時は下手でおぼさ

んに何度も正しいたたみ方を教えて貰い、それでやっと綺麗にたためる様になったという具合でした。他の仕事もまごついてしまい、先生に言われないと次の仕事が出来ない状態でした。しかしそうしてうちに段々言われなくてもどんな仕事を覚えられれる様になり二・三年後には自ら仕事を探して、人から言われずに出来るようになってきました。洗濯たたみも同じで、練習の積み重ねのおかげで綺麗にたためるようになりました。十年前私の夢は外へ働きに行き給料を貰うという事でした。現在は旅館へ働きに行き皆様に高く評価され給料を頂いていますが、そうなるまでは、色々な事をクリアしなければなりません。

旅館へ行き始めたのは、91年の秋からですが、そうなるまでに大

変時間がかかりました。仕事の技術は学園に入って二・三年位で園内ではうまくいく様になりましたが、精神面での問題が大きかった様な気がします。

その例として、今もまだかかえている事だが変わり、人への気配り、人のお付き合いだと思います。今はそれらの問題は私が思うには、まだ完全ではありませんが、十年前から見れば大分良くなっている様にも思います。例えばこだわりの関して言うと、私は赤ちゃんに対して異常なこだわりがあり、今もまだ続いています。現在は、知り合いの赤ちゃんを見ると抱きたくなったり触りたくな



ってしまいます。しかし見ず知らずの子供は、見てもそんな気持ちにはなりません。ところが十年前はもっとひどかったのです。全く知らない赤ちゃんでも、見ると興奮してしまい、先生とスパーに行ったり、プールに行った時に、まして親が「駄目！」と言ったにも関わらず抱こうとして、危ういところで私が犯罪者になりそうな事もありました。その時は一緒にいた先生もとてもびっくりしてしまいました。当時の私には、それがどれだけ重大な事だったが、親や先生に言われるまでは全然分かりませんでした。そういうこだわりも含めて、他の事も先生に教えて貰って、徐々に良くなって来て、この十年間私を変えて来た様だと思います。

十年間のうち、親が亡くなるといふ大きな悲しみを乗り越え、今では先生方が私の親代わりをして下さっているみたいです。ひかりのに入ってから最初の頃は両親が週末に帰っていたため、学園が社会にドーンと出た感じがしました。

（次号に続く）

（袖ヶ浦ひかりの学園利用者）